

### 成人学習(Andragogy)と学習力の比較

	Andragogy	学習力(LBS)
子 供 の 教 育	○学習は依存的である。	学習の魅力を高め効果をあげるためには、幼児であろうと、できるだけ自立的に学習できるようにする必要がある。ただし、自立的にするための支援が必要。
	○教師は、学習に関して、強い責任をもつよう社会から期待されている。	教師は生徒の学習の支援者となる。学習の責任は生徒にある。生徒に学習の責任を考えさせることが必要。
	○学習者（子ども）の経験は、（未成熟ゆえに）あまり価値を置かれない。	少ない経験だからこそ、その経験を学習に旨く結びつけることが必要。論理を暗記させるのではなく、具体的に活用する場を設けて経験させることが必要。
	○先行世代の専門家の経験はもっとも多く利用される。	古い教育の専門家の教育方法を旨く活用することは必要であるが、新しい環境等に合った新しい学習指導方法が必要。
	○教育の基本的技法は、伝達的方法（講義・教材の提示）である。	自分に合った学習方法、学習内容に合致した学習方法、入手可能な学習方法、効果・効率・コストなどを総合的に勘案して、自己の学習方法を選択する。教師はそのお手伝いをする。  (言語情報の教育ならば講義でも良いと考えるが、知的技能や運動技能、態度などは実際に経験することが大事。学校教育が知識偏重といわれているのは正確には「言語情報偏重」。論理なども言語情報として記憶させ、知的技能としては教えていないことが多いと思われる。)
	○同年齢のものは、同じ内容を学ぶ必要がある。	個人に合わせる必要がある。各人が自分で自分に合った内容、レベルの学習をする必要がある。
	○カリキュラムは、標準的であり、画一的である。	個人に合わせる必要がある。各人が自分で自分に合った学習手順をとるべきである。
	○教育とは、前期の通り整備され与えられたカリキュラム（教科内容）をこなし獲得するプロセスである。	学習は自分の現在の学習状況を繰り返し評価し、結果を反映し進めるべきである。修得できない項目は異なる方法で身につけ

		る。(落ちこぼれは、固定的なカリキュラムの責任)
	○その獲得する教育(教科)内容は、いま現在ではなく、もう少し後になって役立つものである。	学習した内容は、次の学習に結び付けて活用する。各自で生活の中で活用させるが、活用できるような場の提供も必要。
	○カリキュラムは、教科の論理(古代から現代へ、単純から複雑へ)に従って組織化されている。	演繹的順番、帰納的順番、全体から個別という順番、個別から全体という順番、新しいものから古いものという順番、活用できる順番など、学習者の得意な方法を選択する。(例えば、歴史も現代から過去に向かう順番で、なぜこのような状況になったのかということ进行分析させながら学習させると面白い効果がある)
	○学習を方向づけるものは、教科中心(subject-centered)である。	学習者中心。
成人の教育	○学習者の自己主導性の(self-directedness)増大。	大人は、指導しなくても自己主導ができる場合が子供よりも多いと思われるが、学習者が自分で学習を進められるように支援することが重要なのは子供の教育と同じ。
	○豊かな学習資源としての経験の蓄積。	経験をどのように学習する対象と合致させるか。過去の学習の経験や、仕事・生活などの経験を結びつけることが大事。無経験なことを学習する場合は、経験の場を作ることが必要。
	○教育の基本的技法は経験的手法(実験、討論、問題解決事例学習、シュミレーション法、フィールド経験。)	自分に合った学習方法、学習内容に合致した学習方法、入手可能な学習方法、効果・効率・コストなどを総合的に勘案して、自己の学習方法を選択する。
	○学習者は自らの学習課題「知への欲求」を発見する。教育者(学習援助者)は、その発見を援助し、必要な道具・手法を提供する。	子供の教育であろうが、成人の学習であろうが、これは変わらない。仕事や生活をしている中で必要性に気づくこともあるが、「知らない」から学習意欲も発生していないことも多い。そのような場合は、大人、こどもに限らず、必要な「知への欲求」を持つように支援することが教育者の仕事。
	○学習プログラムは、生活への応用へと組み立てられ、学習	子供、大人に限らず、これは常に必要。

者の学習へのレディネスにそって順序づけられる。	
○学習者にとって教育とは, 自分の可能性を十分開くような力の高まりを開発するプロセスである。	子供でも同じである。
○得られた知識や技能は, 今日に続く明日をより効果的に生きるために応用される。	子供でも同じである。(今日記憶したことは、後20年後に使うといわれても学習意欲も生まれず、忘れてしまうだけである。例えば微分を学習するとき、物事を無限の小ささに分けて考えてみるということが、数学の世界以外でどのように活用できるかを考えておけば、それは通常の生活にも直ぐに活用できる)
○学習経験は生活能力開発 (competency-development) として組織化される。	子供であっても、生活能力として組織されるべきである。(例えば、中学生になったら「13歳のハローワーク」を読んで大人になってからの仕事、生活を考え、そこから自分の学習を考えることが必要)
○学習の方向付けは, 問題解決中心である。	子供にもPBLの教育は有効である。 (生涯学習として、リタイア後に万葉集の学習をするなどというのは、通常、大人でもPBLにはならないと考えられる)

(Andragogy の出典：森隆夫・耳塚寛明・藤井佐和子編著『生涯学習の扉』平成9年

[http://manabi.pref.hokkaido.jp/manabi/m\\_bar1/book/ken12/syogai.pdf](http://manabi.pref.hokkaido.jp/manabi/m_bar1/book/ken12/syogai.pdf))